長平どんとかちん染め（姫路市白国）

むかし、むかしに、こんな話がありました。

それが、なにせ、わたしたちの近くのことやから、よけいに、めずらしいということになります。

そのころ、都〈みやこ〉に坂田長平〈さかたちょうへい〉という武士〈さむらい〉がいました。気がやさしくて力もち、その上、人に好かれて、ふつうなら長平殿〈どの〉というところを長平どんと呼ばれていました。ある時、都で名のある衣裳屋〈いしょうや〉がやってきて、「これが、いま、一番流行〈はやり〉の着物の、はりまのかちん染め〈ぞめ〉でございます。」といって、しぼりの時服〈じふく〉をつき出しました。

「わしは、あんまりみなりをかまわんもんじゃけど、かちんぞめとはおもしろい、それじゃ一着。」といって買いました。ところで、長平どんが、ちっとま、それを着ただけやのに、汗が出るたびに着物から、血のような色がしみ出てきます。

「はて、おかしなこっちゃ。きしょく（気持ち）のわるいことじゃ。」といい、長平どんは、さっそく紺屋〈こうや〉（そめもの店）に出しました。ところが、紺屋もびっくりしました。「こりゃあんた、ふつうの着物とちがいます。人間の血でそめたもので、これだけのそめ物をするんやったら、よっぽど、大勢の人間を殺しとりまっせ。」と、紺屋の主人がいいました。長平どんはふしぎに思って、これには、何かふかいわけがあるにきまっている。よし、それならひとつ、その原因をしらべてやろうということで、播磨〈はりま〉という名をたよりに、だんだんやってきました。そして、平野〈ひらの〉の人留之岡〈ひとどめのおか〉に、小鷹〈おだか〉・小熊〈おぐま〉という者がいとなんでいる旅館にとまりました。ところが、つぎつぎとふしぎなことがあって、この旅館でいよいよねようと思うと首の下におく枕〈まくら〉が何と冷たい石の枕ではありませんか。

「はて、へんなこと。」と思っていると、どこからともなく、“旅の人石の枕はせぬものじゃ”という歌を、ふしおもしろくうたう者があります。たしかに、女の人の声みたいです。しかし、どこからきこえてくるのかはっきりしません。なんどもくりかえしています。どこかに出口はないものかと、あっちこっちを探してみました。“旅の人、窓がしずかにあくものじゃ”という、同じ人らしい歌がきこえてきます。長平どんは窓へ手をかけ、さっと開きました。そし て、声のしてきた方へそっと歩いていきました。すると植込みの中に人のけはいがします。

「あなたでしたか、よくしらせてくれました。いったい石の枕ってのは何です。」「それが…。」と、その女はいいかねているようでした。女は手まねで、ここへきて姿をかくせ、と教えるので、長平どんも植込みの中にかくれました。女は、小声で、“この家こそ播磨の血干染〈ちぼしぞめ〉を出す、おそろしい盗賊〈とうぞく〉のすみかです。旅人を酔いつぶして、石の枕をさせ、おもりの石を上からかぶせ、身動きさせないでおいて財物〈たからもの〉をうば い、血をしぼりとります。かしらの小鷹〈おだか〉・小熊〈おぐま〉には八十七人の手下がいます。自分はここの召使い〈めしつかい〉で、にげようにもにげられないのです。”ということを教えてくれました。

「よし、そんな悪い奴なら、なんとか、やっつけてやりたい。」長平どんはいろいろ考えましたが、二重、三重にとりまかれた、このかこいの中の旅館で は、どうにもしょうがありません。ふたりでそうだんして、はかりごとを考えました。手下が酒盛〈さかもり〉をする最中に、やっつけようということでありました。

「では、ちょっと見てきます。」女は中へ入っていきましたが、すぐ出てきました。

「ふたりとも何にも気がついていません。酔っている中で、ふたりのかしらの束髪〈そくはつ〉（頭のまげ）の中へ血干染につかう鮮血玉〈せんけつだま〉をしかけてきました。」「それで、鮮血玉はどうなりますか？」と、長平どんがききました。

「はい、もし追いかけてくるようでしたら、あなたは、ふたりの束髪〈そくはつ〉を的〈まと〉に弓をうってください。それが破れて、赤い血が顔に流れ、目が見えなくなります。その間に逃げましょう。」「よろしい、承知しました。」

ふたりは、いいあわせて、植込みから逃げる方法を考えました。すると、目の前に一本だけ、すぐれて太い竹のあるのに気がつきました。

「よしよし、この竹の上までのぼっていけば、竹は外へしだれる。そのとき、藪〈やぶ〉の向うへ飛びおりればいいのだ。さ、しっかりしなさい。」と、大力の長平どんは、女をかかえながら、やすやすと竹にのぼり、うまいぐあいに、小鷹〈おだか〉・小熊〈おぐま〉のすみかをぬけ出し、いちもくさんに、にげるだけにげていきました。長平どんは姫路の男〈おとこ〉山へ逃げ、女は姫〈ひめ〉山ににげのびていきました。

しばらくたって、二人の逃げ出したのを知った小鷹・小熊は、手下を起こしましたが、みんな酔いつぶれてしまっています。「おのれっ！」と怒って、かしら二人が追ってきましたが、もう長平どんと女の姿は見あたりません。

しかし、はるかにこれを見た長平どんこと坂田長平は、女にいわれたとおり、弓に矢をつがえました。

小鷹も小熊もいつも頭は束髪〈そくはつ〉でした。ころはよしと見て、“ひょうふっ、ひょうふっ”矢を射込みました。

二本の矢は、うまくしかけてあった鮮血玉に命中しました。たちまち、まっ赤な血がほとばしり出て、小鷹・小熊の両眼に流れこみました。「ああ、もうだめだ、何にも見えない。手下の奴は何をしているんだ！」

「それに、ゆうべの客と、召使いのむすめはどこへいったんだ！」小鷹・小熊は、くやしがって、むちゃくちゃにかけずりまわりましたが、見えない目ではどうしょうもありません。しかたなく、引返す途中の小川の水で目をあらいました。けれど、いくらあらっても血はとれないでとうとうめくらになったということです。石の枕で、殺されたたくさんの人の、たましいののろいだと世間の人がいいあったそうです。